

吉備国際大学
社会学部研究紀要
第19号, 63-72, 2009

日本統治で生まれた川上の演劇 ——「台湾鬼退治」、「オセロ」、「生蕃討伐」

井上 理恵

**A Study of KAWAKAMI Otojiro in Taiwan,
“*Taiwan Oni Taiji*”, “*Othello*”, “*Seiban Tobatu*”**

INOUE Yoshie

Abstract

KAWAKAMI Otojiro In Taiwan

KAwakami Otojiro has given three Taiwanese plays.

One is “*Taiwan oni taiji*” in 1896, the others are “*Othello*” in 1903, and “*Seiban tobatu*” in 1911.

I will make these plays explained in this paper.

Key words : KAWAKAMI Otojiro Taiwan Play

キーワード : 川上音二郎 台湾 新演劇

日本統治で生まれた川上の演劇——「台湾鬼退治」、「オセロ」、「生蕃討伐」

井上 理恵

はじめに

台湾は複雑な歴史を背負わされてきた島である。日清戦争で勝利した日本が、清国から台湾と澎湖島を割譲されたのは一八九五年であった。正確に言えば日本は、日清講和条約調印前に澎湖島を占領しているのだが……この年から日本統治が始まり、一九四五年の太平洋戦争の敗北までこの島を支配する。台湾島民は割譲に反対したが清国は聞き入れなかったのである。そして激しい抗日運動がこの前後から始まる。川上音二郎の台湾を題材にした芝居（演劇）はこの日本統治という状況下に誕生する。

日本以前にもこの島は長い間、他国の支配下に置かれていた。一六二四年にオランダ東インド会社がこの島を占領し、一六六二年に鄭成功に駆逐されるまで続く。スペインもこの島を狙い、一六二六年に淡水、基隆（キールン）^{（注）}一帯を占領したが、一六四二年にはオランダによって追い出された。

鄭成功とその子孫の鄭氏政権は一六八三年に清朝に打ち負かされるまで続く。その後台湾は清朝に約二百年、次いで日本に約五〇年、17世紀のオランダから20世紀半ばの日本まで、四つの政権の支配下に置かれていたことになる。澎湖島は台湾島よりさらに前、12世紀の宗代には既に「漢人」が定住し、元代には元朝の一部になっていたというからこの温暖で美しい島々「美麗島」の島民たちは、名前とは裏腹な苦しみの中に置かれていたのである。

台湾島には「漢人」が島に来る前、太古の昔、陸続きだった東アジア大陸から渡ってきた民族が大勢いた。いわゆる先住民族（原住民族）だ。彼らは「高山族」と「平埔族」と言う呼び名で、「漢人」によって区分されていた。先住民族は実はもっと多く存在していたが便宜的に山にすむ人々と平地に住む人々とに分けられたようだ。厳密に言えばこの区分は誤りで

あったらしい。さらに清朝政府はこの先住民族に自分たちに都合のいいように三つの名称をつける。これは統治するための分け方だった。「生蕃」「熟蕃」「化蕃」がそれで、政府の「教化を受けた」「漢化した」者たちと「服従して納税する」者たちを「熟蕃」と呼び、そうでない者たちを「生蕃」と呼んだ。その中間にいる存在を「化蕃」と位置付けた。「蕃」は先住民を表す語として充てたのである。これは野蛮に通じ、未開の他民族を意味する語であった。島全体が占領され、そこに住む人々もこのような形で差別化されながら長い間生きていくことになる。しかも日本が統治するようになって、この言説は生きていた。この呼び名が後に触れる川上演劇に登場することになる。川上音二郎は台湾新演劇の祖といわれ、台湾の現代劇に大きな影響を与えたが、差別的な状況をそのまま取り込んで時流に棹指す芝居を上演していたのである。それが迎合かあるいは叛旗か、見ていかなければならない。

小論では、川上音二郎が台湾、及び澎湖島を舞台にして上演した「台湾鬼退治」「オセロ」「生蕃討伐」を取り上げ、その時代的背景や上演の意図、内容、反響などを紙幅の許す限り検討し、これまで明らかにされなかった部分に光を当てていきたい。

1 「台湾鬼退治」

川上音二郎（一八六四―一九一一）が台湾に関する芝居（演劇）をはじめて舞台にあげたのは一八九六年二月である。その名も「台湾鬼退治」（東京浅草座初演が二月二七日から、京都常盤座再演が四月一〇日から、その後大阪でも上演された可能性が高い）で、台湾人を鬼にたとえて日本の軍人が退治するという戦争劇を想像させるタイトルだ。これは二番目物とし

で登場し、一番目は時代物の「堀川夜討」であった。

川上は、日清戦争が一八九四年八月一日に始まるとすぐに上演許可を取って「壮絶快絶日清戦争」(東京浅草座一八九四年八月三十一日〜一〇月七日)を上演、どの劇団よりも早くに戦争芝居で大きな成功と人気を得て、新演劇の名をあげた。もちろんこれは実際の戦地を知らずに作っている。もともと実録物で出発している川上はリアルさに執着し、それが売物でもあったと推測されるが、公演後願い出て自ら戦地の朝鮮半島に出向く。帰国後すぐ「川上音二郎戦地見聞日記」(市村座 同年二月)を舞台に上げ、これにも成功、翌年には「威海衛陥落」を歌舞伎座(一八九五年五月)で上演するという驚くほどの活躍ぶりであった。新演劇の俳優が、歌舞伎のために建てられた歌舞伎座の舞台を踏んだという明治演劇はじまって以来のこの出来事は、歌舞伎の看板役者市川団十郎を激怒させるという逸話を残した。

こうした一連の川上の足跡を見れば先を読むことに長けた川上が、戦争に勝利して手に入れた台湾を題材にして芝居を上演するのは目に見えていた。もちろん客受けを狙ったことだ。「桃太郎」の鬼退治を連想させる外題はいかに即席で、「勝利と獲得」の浮かれ気分に乗った舞台作りを推測させる。しかも結果的にはこの公演は大入りで川上はこれでも成功した。江戸時代からある歌舞伎という旧派の芝居に対抗的な明治生まれの新演劇が、近代国家の建設と歩みを揃えて徐々にその存在を確実なものにしていく道筋が読めて来る。

さて、詳細をみよう。

川上演劇の資料集の先駆け、白川宣力著『川上音二郎・貞奴^(注2)』にある都新聞「梨園叢話」(しばいだより)によれば「台湾鬼退治」の役名は次のように記されている。藤沢浅次郎の特務曹長旭義輝、中野信近の蕃賊何安、寺島倉二郎の藤林中尉、柴田善太郎の軍曹田村義臣、小西福一郎の神戸中尉、河村昶の軍曹鈴鹿武雄、堀切脇三の李蔡延娘、そして主役川上音二郎の佐藤大尉、その他多くの日本人兵士や台湾人が登場する。蕃賊として名が挙がっている役名は陳南・陳神・陳發・陳水・宗元・陳正・陳水牛・陳浩・陳章・陳名などいかにも外国人のように見えるが、このような名前はあまりないから実情のわからぬまま適当に名付けられたのがよくわか

る。入場料に関しては、中央新聞に二十七日開場、場代は棧敷一円八十銭、高土間一円四十銭、平土間一円、初日は何処でも五十銭と報じられている(二月二十七日号 白川本)。春木座の公演では上等席が一円九十銭であったし、歌舞伎座で公演をした時は、棧敷五十八銭、高土間四十六銭、平土間三十六銭で「大勉強」(都新聞 白川本)であったというから、それを考えるとこの興行は当時の並みの入場料をとっていたと見ていいだろう。^(注3)

白川本にはこの二つの記事のみ引かれている。おそらく氏は「台湾鬼退治」をそれほど重視していなかったのだと推測される。

この近辺の新聞・雑誌をもう少し見てみたい。
すでに都新聞は、二月一九日の梨園叢話に浅草座演目の場割りを載せていた。

一番目『元暦堀川夜討』(序幕) 相州腰越松並木場(返し) 同浜手の場(二幕目) 東洞院花屋茶店の場(三幕) 醒ヶ井土佐坊旅館の場(四幕) 堀川御所南殿の場(返し) 同広庭の場、二番目「台湾鬼退治」(序幕) 蕃賊横行の場(二幕目) 名譽の戦死の場(三幕目) 大尉豪胆の場(四幕目) 退治勝鬃の場等なりと

そしてこの日から「堀川夜討」の筋書きが都新聞に連載される。推測であるが梨園叢話の担当者が際物の「台湾鬼退治」より時代物「堀川夜討」の筋書きを連載したのは、新演劇が時代物を上演するということで、この方が客の興味を引くと見たのだと思われる。おそらく「台湾鬼退治」はあげ本を警察に提出していて筋の詳細が公表されていなかったのだろう。さらに深読みすれば、川上が新作の筋を初日前に公表したくなかった、ともいえる。おそらくこれが当たっているかもしれない。

実はこのとき、日本軍は台湾の鎮圧にはほとんど手を焼いていた。一月十一日の都新聞二面に「匪徒鎮圧方針」が載り、翌日にも「匪徒多く潜伏す」と言う記事があり、樺山資紀、桂太郎、乃木希典の代々の総督は「匪徒」と呼ぶ先住民族の抵抗に困惑していた。その中で乃木がそこそこ成果をあげたというが、鎮圧したわけではなかった。近衛師団が出兵して苦戦していたとも指摘されている。台湾が一時的にせよどうにか鎮圧され落ち着く

のは、二年後児玉源太郎と後藤新平が台湾に渡ってからであった。したがってこのあたも当時の新聞を見れば分かるように台湾への出兵と討伐は明治の終わりまでずっと続いている。つまり川上の「台湾鬼退治」はそうした政府の対策が上手く行かず激戦が続く中で初演されていたのである。次に引く〈梨園叢話〉には近衛師団の見物予定が記述されている。これは川上がどのような形で匪徒対策に苦しんでいる日本軍を描出するのかを確認するために見きたと考えてよく、その舞台が軍を否定している場合には上演許可を取り消すことも考慮していたと推測される。これまでも川上はそうした状況に何度も陥っていたし、上演禁止もされていたからだ。

「梨園叢話 浅草座は予定の如く昨日正午より開場したるに壮士役者の時代劇は何んなものかと思ひてか来観者は開場前に満員となり中々の好人気に見受けられしが近衛師団の各将校方は明二十九日「台湾鬼退治」を見物さる、由」(都新聞二月二十八日号)とある。抗日運動の激しい台湾鎮庄に手を焼いていた近衛師団は川上の舞台を気に入ったらしく、後日川上一座は小石川の細川侯爵邸に呼ばれて「台湾鬼退治」を上演する(都新聞三月一十七日号 白川本)。どんな舞台が展開されたのか、劇評を見てみたい。

実は、劇評はほとんど残されていない。それは丁度この時期に川上が三崎町にはじめて建築した西洋風の劇場——川上座の開場に関するニュースと、川上と料亭の娘との間に子ができたという(川上の落しだね)騒動の記事が新聞を賑わしていたからだと推測される。萬朝報も都新聞もそのゴシップ記事を数多く掲載している。川上は新聞・雑誌の報道にかなり重きを置いていた新人類で、好意的な批評は大歓迎、悪評もゴシップも当人にとっては迷惑どころか全て芝居の宣伝——広報活動になると考えていたようだ。この辺りも他に抜きん出た彼の近代的な新しさであった。

旧派の歌舞伎を批評の対象としてきた『歌舞伎新報』が(小芝居めぐり)で取り上げたが、辛い批評である。筆者は蘭圃(注4)。

二番目台湾鬼退治は、川上一座得意の出物なりといふ、(略)川上丈の扮せる佐藤大尉が営中に於て、下僚に向ひ相語るに、大切な軍刀を手遊にする様な不体裁はなさるべし、俳優の資格なき彼等に向ひ

て、技のいかんを兎かういふは実に無益の業なり。(略)二番目狂言の山は、佐藤大尉が単騎蕃窟に入りて、帰順せしめんとするに在るべし。然るに大尉が蕃族を説く所の趣意、果してその当を得たるや、否や予は大にその然らざるを認む、いかに軍人なればとて、剽悍なる蕃族を説くに、猛然として恐喝するが如き趣意を以てせば、いかでこれに服すべき、さなきだに疑ひ深き蕃族、かへりて反抗心を生ずべし。少し心ある者は彼等を説くに恐喝を以てせず、わが天皇陛下の仁政にして徳澤の汎きことを示し、清国の虐政を脱して、陛下の臣民となるは、暗夜を出て旭日を迎ふるに均し。然れども若しこの寛仁なる皇軍に抵抗せば、わが精鋭なる軍隊は立ちに圧殺すべし、と剛柔相濟すの手段にあらざれば、到底彼等を服せしむる能はざる事を知るべし、(以下略)

この評でおおよその舞台が想像される。評者は台湾島民の抗日運動の激しさを知らないようだ。過去の時代のぬるま湯に浸っている住民なのだろう。歌舞伎の批評家は露骨に天皇制について触れることはしない。それゆえこの評者は歌舞伎批評の専門家ではないかもしれない。川上は舞台上で「匪徒」を帰順させるためにかなり威圧的な態度をとっていたことがこの批評から分かるが、かりに評者の指摘のように天皇の威光を出したところで帰順するはずはない。それは川上でなくとも当時の状況に明ければ分かったはずだ。むしろ川上にはそうした権威を殊更敬う舞台を作る気持ちにはなかったと見る。川上は権力や権威を利用はしたが、そこへの恭順を示したことはなかったからである。現実には日本の軍隊はかなり激しい攻撃をしている。したがってこれを見にきた近衛連隊は、この評者のような舞台をみたらむしろ真実から遠いと感じたであろう。たとえ川上の舞台が絵空事であっても日本軍が勇ましく「匪徒」を帰順させていることに希望と安堵の念を抱いたと推測される。それゆえに侯爵邸に呼ばれて上演したのだ。

この芝居は、翌年の一月二月まで各地で再演されていた。それは引き続き抗日運動が激しく、日々新聞報道されていて台湾は日本の圧力に屈しなかったからだ。状況的には実録物としてこの芝居の存在理由があった。他国の民族を日本国に帰順させることに對する川上の発言はない。自由民権

運動から演劇に足を踏み入れたとされる川上であるが、彼にはそこまでの反体制的な思想はなかったとわたくしは推測している。歌舞伎と言う江戸時代の演劇しか存在しなかった明治という時代に、彼は同時代の息吹を吸った新しい演劇を生み出したかっただけなのであるから。その意味でも川上は自身の願望を舞台に上げて観客に同時代演劇を提供していた演劇人だったのである。

2 「オセロ」

次に台湾が登場するのはシェークスピアの「オセロ」(江見水蔭翻案明治座一九〇三年二月初演)だ。これは二度にわたる海外巡業から帰国した川上が、音楽の入らない、いわゆるストリートプレイの正劇を主張して、いつてみれば演劇界に大上段に切り込んだ公演といってもいい。これに付いては触れなければならないことが多く、単なる台湾関連では片が着かない。いわば川上演劇の鍵になるからだ。正劇とは何か、この時代に川上は何故正劇を主張したのかに始まり、日本版「オセロ」の台本分析、劇評の検討、観客の反応、その後の演劇界の状況、演劇史の位置付け等々、明らかにしなければならないことが山積みされている。それには与えられた紙幅が不足する。「オセロ」のみの別稿を用意しなければならないと考えている。したがってここでは、川上が「オセロ」で何故、キプロス島の変わりに台湾を舞台にしたのか、初めての川上の渡台は如何なる意味をもつか、の二点に絞って見ていきたい。

もともとシェークスピアの作品でも、キプロス島はそれほど重要な意味を持たない。ムーア人であるオセロと白人の妻デズデモナの愛と苦悩の物語に焦点が当てられているからだ。もちろん権力闘争に目を向ければ、オセロとイヤーゴの関係が浮上し、それがオセロ夫婦の愛の破綻へと導かれることになるが、それでもキプロスでなければならないことはないからだ。

川上がシェークスピア作品を日本バージョンで上演したのは、「ヴェニスの商人」裁判の場が最初であるが、川上は既に「又意外」(一八九四年二月)や「又又意外」(同年七月)で外国種の作品を日本バージョンで上演している。当時の演劇状況では外国作品を日本バージョンで上演するの

は極めて普通のことであった。むしろ問題にすべきほどの程度内容が変更されているかであった。したがってキプロスのオセロを、澎湖島の室鷺郎とするのは、当時の日本の政治的状況を見れば観客の理解を得やすい着想で、川上だからこそ舞台設定であったといっている(注5)。

川上は海外巡業から一九〇二年八月一九日に帰国して以来、沈黙していた。そのために明治座公演が決まると新聞報道は賑やかになる(都新聞九月七日白川本)。今度の川上の芝居は「西洋種にして世界を台湾に仕組む」(都新聞一〇月二六日白川本)、来月には現地を訪れる予定と報道され、次いで「今は独逸連邦の一なるヴェニスが独立国の頃土耳其との戦争にヴェニスの一孤島へ土兵の襲来せるをオセロが討伐の命を受けて鎮撫に向ふと云ふを日本の世界に書換へるに、ヴェニスを東京とし孤島を新領地なる台湾澎湖島中の吉貝島(キッポートウ)俗に海賊島(以下略)」(川上の渡台)都新聞一九〇二年一月一九日白川本)に置き換えた。川上は一九日に台湾へ行く筈、と初めての渡台が報道される。

一九〇二年一月一九日に神戸から出航、二四日に台湾へ到着、川上は初めて台湾の地を踏む(注6)。川上が何ゆえ台湾の澎湖島へ行こうと考えたのか。けい舟の「海賊島 川上音二郎の探検」によれば、「オセロ」の装置が原因であったようだ。小山正太郎と浅井忠が考案した装置は樹木の茂った島でシナ風の勾欄がある装置であった。ところが川上が台湾へ行ったことのある人に聞けば、澎湖島は樹木など茂っていない岩場であると言う。それで実際に見に行く事になったのである。

「海賊島 川上音二郎の探検」(六回連載)には、この島の名の由来、「土民」の日常生活などが綴られている。最後に「オセロ」の書き割りは描きなおされるだろうといい、さらに川上の弁として、「我々は旧俳優のやうに舞の素養があるでもなければ舞台に於ける一定の態度の修練もない、単に現在のま、此俣で新俳優になつたので別にこれと云って自分の芸に財産を費して貰うてないから新俳優といふ以上は此の位の仕事はして切めても責任を尽すのが当然であらうと思ふ」と、大金を遣って事実を調べるために台湾行きを決定した理由が記されている。このけい舟の記述が、川上の語ったものであるかどうかは詳らかではない。しかし仮に川上の言説でなかったとしたらなおさら、(芸重視)と言う世間のこうした視線の中に

彼は生きていたわけで、川上音二郎の一見突飛な行動も大きな負い目を背負うが故のことであつたのだ。新演劇の先駆けとして歩き始め、それを定着し、多くの観客に喜ばれてもなお、歌舞伎俳優こそがプロの俳優だという批評家たちの目が存在し、それに対する現代演劇の俳優川上音二郎の闘いがあつたことを種々の新聞報道は物語っている。

翌一九〇三年一月十五日、都新聞は川上の正劇に関する記事を載せる。

新演劇が「旧劇に化せられて最初の主義方針が分らなくなつて（略）新演劇としては殆んど絶望の姿となりたるが（略）川上音二郎は此等を混同せる無主義の演劇を去り正劇（ドラマ）と銘打つて先づ来月明治座に旗幟を翻すと云ふ」（白川本）。そして海外巡業で評判をとつた貞奴が、デスメーナをやることに決まる。このあと川上は「俳優に踊りは要らぬ」という論を時事通信に連載する（一月三〇〜三二日）。これは言つてみれば、踊りを基礎に置く歌舞伎俳優への挑戦状とも取れる。この一文は、注6に引いた台湾日日新報に既に二ヶ月前に連載されていた「川上音二郎丈の談話」（一九〇二年一月二六日〜二月一〇日）とほぼ同じである。おそらく川上は海外体験で得た体験や知識を次の公演に利用すべく、種々検討していたと推測される。部分的には『川上音二郎欧米漫遊記』に既に記されていたが、これらを川上は正劇を主張する根拠とした。翌年『歌舞伎』（一九〇三年三月第三四号）の「翻案『オセロ』に於ける俳優の意見」（鈴木春浦）で、川上は「『オセロ』を採つた理由」を書く。ここでは音楽の素養がないから音楽のない物を選んだと述べている。歌舞伎が音楽入りであることを思えば、これも先の踊りと同様に位置付けることが可能だ。これらの一文が川上の手になるものか、ゴーストライターが存在したのか、それについては詳らかではない。が、文字を読み、弁の立つ男と言われた川上であるから、おそらく彼自身の言説と見ていいだろう。

こうして川上は日本ヴァージョンの「オセロ」を舞台に上げた。二月十一日の明治座初演以降、三月に京都歌舞伎座、神戸大黒座、そして大阪浪花座を四月三日に打ち上げるまで上演を続ける。

3 台湾巡業と「生蕃討伐」

「生蕃討伐」は一九一一年七月一日から七月一六日まで、川上が大阪に

建てた劇場「帝國座」で初演された。川上はこの年の十一月一日に四八歳で他界するから最後の企画・出演作になった。

これまで川上の最後の年に関する演劇公演の記述は少なく、白川本でもわずかであつた。白川は資料集に、一月の東京本郷座「天風組」「成功疑ひなし」、二月の大阪帝國座「椿姫」「役者ぎらひ」、七月の大阪帝國座「祇王祇女」「生蕃討伐」の三件をあげ、一〇月川上の持病の再発、手術、一月死亡という記述を載せている。二月から七月まで、九月から一〇月までの行動は明らかではなかつた。川上が演劇活動の中心を大阪帝國座に移したこともその要因で、東京発行の新聞・雑誌が川上情報を載せなくなつたからだとも推測される。

この空白期に川上は一座を引き連れ台湾で巡業をしていたのである。^(注8)川上の渡台について大阪朝日新聞や大阪毎日新聞を調査したが記事はなかつた。台湾巡業から帰国して「生蕃討伐」を仕組んでから、この上演に関する記事を幾つか見つけたので台湾巡業にふれた後で記したい。

川上一座は基隆から台湾に上陸し、台北、台中、台南、嘉義、を巡業、基隆に戻つて六月五日に神戸に向け台湾を出航、その間約一ヶ月であつた。以下、台湾日日新報が報ずる記事からこれまで知られていなかった川上の台湾巡業を跡付けてみよう。

この巡業は台湾の興行師高松同仁社主の招きによる。一九一一年五月一日、信濃丸で基隆港に到着、列車で台北へ向う（五月二日号）。一行は、川上と貞奴、女優澄子と登満子、福井茂兵衛、荒川博士ほかスタッフも含め七二名。台北停車場には大勢の人々が押しかけ、特に女子供が八分で、洋装で乗り込んだ貞奴や女優達に魅せられたようだ。五月三日、台北朝日座で初日開演、台北の近隣の街からも観客が押し寄せる。演目は「巴里の仇討」、貞奴の踊り「新道成寺」、喜劇「成功疑ひなし」の三本。当初は満員ではなかつたらしい。それは川上演劇が「幼い子供の入場を謝絶し且つ場内に於ての飲食喫煙等を謝絶されたものと思つて居る為め子供を連れて行けないからと残念がる連中がある様だが決してそんな窮屈な事は制限されてないのであるから」（五月五日）と、報じられて以後満員御礼の札が立つようになる。夕方六時に始まり、打ち出しは一二時。

五月九日の記事には「椿姫」、舞踊「鶴亀」の上演が報じられ、台南でも公演を持つ予定だとある。一日からは「ボンドマン」第三回替り外題として広告が載り、さらに一四日に御伽芝居「浮かれ胡弓」を朝日座の昼の時間を利用して児童生徒に無料で観劇させる記事も載る（五月一〇日号）。五月一四日で朝日座の公演は終了予定であったようだが、好評のため四日間日延べになる（五月一四日号）。日延べの公演演目は「児島高德」「玉手箱」「唾旅行」（五月一五日号）。

台北を後にして、台中の台中座で開場するのが五月二三日、大入りで二五日まで日延べされる。演目は朝日座と同じだ。ここで川上は病気になる（五月二四日号）。が、予定通りの行程で五月二六日に台南公演四日間、六月一日、二日の嘉義公演を終えて六月五日に信濃丸で帰阪する。

川上は備後三郎を演じた後、舞台で倒れ、翌日の演目を「椿姫」に替えたと言う記事も見られる（六月四日号）。五月二四日に台中で倒れ、温泉治療をしていたらしいが、無理な行程が持病を重くしていたのだろう。これが結局川上の命取りになるのである。六月五日の信濃丸には、川上一座に加えて、留学する林家の子息や新渡戸稲造博士などもいたらしい。川上一座の楽団の演奏もあり、しかも近年にない見送り人の数で大層賑やかであったと報じられている（六月六日号）。

六月六日号の「演芸界」蘭に「川上は高松同仁社主と今回の関係を機とし内地帰還と共に先づ佐藤歳三一座を台湾へ送り続けて美津五郎等の一座を送り大に台湾の劇界を賑はすさうである而して其都度自身渡台して種々尽力すると語り又一方大阪の帝國座に於て生蕃討伐の新狂言を仕組み一切の武器装具を台湾に求め大に蕃風鼓吹の任に当ると語つてゐた」とある。川上は実際に台湾を横断し、彼の地と人々に接することによって新作に何を仕組んだのだろう。どのような「生蕃討伐」であるのか、見てみたい。

こんな記事が東京の都新聞に載った（七月五日号白川本）。

▲如才ない川上 台湾から帰った後は遭う人毎に生蕃討伐は日清日露戦争以上の艱難で目撃すると同情に堪えんでゴワすと吹聴し居りしが愈大阪の帝國座で「生蕃討伐」といふ台湾土産を脚色し前の吹聴

も一つの広告でウンと人気が立てるとは如才ない

生蕃討伐が日清日露以上の艱難というのは、討伐が成功していないことを指している。「同情に堪えん」という川上の発言は、現地を見てきた者の発言として重要だ。討伐軍に同情しているのか、あるいは「匪徒」に同情しているのか、興味深いものがある。

大阪毎日新聞と大阪朝日新聞を調査した結果、これまで曖昧であったことがはっきりし、当時の状況がさまざまに浮かんできたのである。まず初日は七月一日で（六時半開演）、洋装の女性の横顔と英字のパンフを見ている姿の広告が大阪毎日（七月一日号）にも大阪朝日（七月二日号）にも載る。白川氏は大阪朝日の記事が七月二日に載っているのが初日を二日と記録したのであるが、朝日の広告には「当七月一日ヨリ 毎日午後六時半開演」（七月二日号）とあり、大阪毎日には「本日ヨリ 毎日午後六時半開演」（七月一日号）と出た。それにしては関連記事や批評の出るのが遅い。

実はこの日、角座の文芸協会の「ハムレット」も初日であった。角座は四時半開演、川上一座は二時間後だ。新しい演劇運動をはじめた坪内逍遙の文芸協会の来阪は一つの事件であったようだ。したがって翌日から新聞は文芸協会の「ハムレット」で紙面が占められる。朝日は、角座の入りを「早稲田の交友や有らゆる関係者の熱心な運動に駆り催されて来た多種多様の見物は初日ながら半分以上の入りを占めた大阪芝居の初日としてはまづ成功の中である」（七月三日号）と伝えている。毎日には三頁も「ハムレット」関連記事を載せている。坪内博士主宰の「文士劇開演中の角座」のチケット二百枚を各来店の方に無料で進呈するという広告をクラブ化粧品本店は出す（大阪毎日七月三日号）。大阪毎日には「わが劇壇の為に」という菊池幽芳の連載が始まり、新しい演劇とは何かが問われだしている。文芸協会公演の影響だろう。

こうした大阪の状況で川上一座の記事や劇評が載るのは遅くなったと推測されるが、川上一座は大盛況であったようだ。大阪毎日の「えんげい百種」欄で「▲初日に満員の帝國座は貞奴の乗馬が大喝采舞台を往来する趣花やかで勇ましいのが評判である」（七月四日号）と報告され、大阪朝日の「演芸世界」にやっと劇評（七月五日号）が載るのである。この劇評は注に引

くが見ての通り分かりにくい。「生蕃討伐」の筋も場面展開も配役も把握できないのである。ここでは大阪毎日の〈えんげい百種〉評を長いが引きたい。

「帝國座（略）▲「生蕃討伐」は時宜を得た狂言である、貞奴の扮する龍造寺大尉夫人木曾秀子は、元芸妓であつたのを大尉（中野）に落籍され愛憎を受け先妻の子で軍曹虎彦（川上磯太）にわがま、を言はれながら自分の出世の為に何も彼も辛抱して居る、其処へ元の養父勝造（藤川）といふ悪漢が台湾お六（花園）といふ莫連と共にゆすりに来て難題をいふ、切破つまつて秀子は大尉の手箱にある用金五百円を親子の手切として渡す、外来の賊に盗まれたものと装らうつもり▲此秘密を折柄別室に大尉の帰りを待ち居た篠崎少尉（川上）が聞き知る、不図出て来たので秀子が驚き芸妓時代の手くだにて少尉に味方してくれと情に寄せて縋る、正義の少尉は左様な味方は御免と言つて去る、行違ひに大尉が帰る▲秀子は大尉の嫉妬心あるに乗じて紛失金を篠崎少尉の所為らしく大尉に告ぐ、これが根になりて大尉は少尉を憎み、特に命じて少尉を生蕃征伐にやる、虐殺の暴挙を恣にする生蕃も案外篠崎少尉の人道に厚い誠心を感じて酋長（荒川）以下帰順する▲しかし此討伐隊加わつた大尉の子虎彦は隊長たる少尉の方略を妨害し却て生蕃の一人を斬り大事を起さんとし、少尉は公事の為之を斬る▲少尉は大功なしたにも拘らず大尉の為に営倉に囚はれ、軍法会議より死刑宣告を受ける最後の場合に、秀子は自分の不心得から斯かる冤罪を与へたかと悔いて、馬に乗りて少尉の危難に駆けつけその無罪の次第を告げるといふに終局す▲此筋にて台湾討伐隊の苦心惨澹、軍隊に新旧思想の衝突のある事、台湾住民の現状等をほの見せる▲秀子の乗馬は無論喜ばれるが、舞台面は生蕃阿蓮庄山中の虐殺、酋長の山賽が一番眼さきが変はて居る、溪流の上に釣橋がありその上を生蕃が猿の如く飛ぶなどは面白く、一度幕をしめて、溪流の処に死屍累々たる様を青白い電燈に照らせた場面を再び幕を開けて見せるなど大いに感興を惹く▲川上夫妻の外福井の隘勇（あいゆう）と中野の大尉、藤川の中尉など目を惹く」（大阪毎日新聞 七月七日号）。

この一文で「生蕃討伐」がかつての、ただ「匪徒」を痛めつけたという「台湾鬼退治」とは異なり、生蕃に対して同情心を持っていることがわすかだがわかる。生蕃討伐というよりも大尉の嫉妬心を利用して悪意が生み出す事件と見たほうがいい作品であるが、台湾の現実を知った川上が、「時宜に」かなう生蕃討伐を全面否定するわけにもいかず、しかし肯定して無残に倒すのも賛同できず、良心的な少尉とそれに応える誠意ある生蕃たちというように表現せざるを得なかったのは、消極的ながら現実を知った川上の想いであつたとみてもいい。大阪毎日にも朝日にも、毎日のように台湾征伐の記事が載るのがこの時の現実であるからだ。

同時期に今ひとつ大きな話題があつた。それは露西亞からの観光団である。七月一日、彼らは軍人、教師、男女学生、新聞記者からなる訪問団で、造幣局・大阪城・大阪朝日新聞社・清水谷女学校・大阪高等商業学校を訪れ、夜には帝國座を観劇した。川上は露西亞で金時計を皇帝から貰っているから、それを劇場の廊下に展示していたという。露西亞の観光団はヨーロッパを魅了した貞奴（SADA YACCO）を熟知して、期待して観にきたようだ（大阪朝日 七月一二日号）。川上は露西亞国歌を演奏して出迎えた。国家演奏に立ち上がつて出迎えなかった大阪府高官がいたらしく、それを皮肉っていた記事もある。^{（注1）}

川上は言語が通じない彼等の不便を思い演技を変えたいらしい。「昨夜の芝居は川上も貞奴も嘗て洋行したる経験もあり言葉を少くしぐさを多くしたる事とて言葉の通じぬ人達にも興味深く見物せられ殊に貞奴が男装して本物の馬にまたがりて出場したる時には非常に婦人達の注意を惹き一行中一番声のよいタグノヴァ嬢は銀鈴を振やうな声にて貞奴の表情の美しさを賞し・・・」（大阪毎日 七月一二日号）と報道された。終演後川上や貞奴に面会して彼らは大喜びであつたという。

この芝居の売物の一つは貞奴の乗馬であるようだ。彼女は若い頃から馬術を習い、かなり乗りこなしていたというから舞台を横断するのは容易かつただろう。帝國座楠村坑深山の場（なんしこうしんざんのば）が大阪毎日に写真入で紹介されているが、美しい白馬に跨った凛々しい乗馬姿である。本ものの馬を出すと言う思いつきは、話題を呼ぼうと意図した川上の発想に違いない。さらに毎日や朝日に言及されている舞台を考えると、

特に照明と装置に大きな効果が上っていたようだ。画家に装置を描かせたり、光と闇の照明の効果を導入したり、常に新しいことを提供し続けてきた川上の発想は枯れることなく、次々と新しい冒険をしていた様子が理解される。川上の斬新さは最後の舞台でも発揮されていたのである。

この公演は七月一六日に終り、その後名古屋の御園座へ移動した。一六日の昼、浜寺海水浴場の開場披露会に川上は浜寺公会堂で御伽芝居をみせたようだ（大阪毎日 七月一五号）。台湾でも無料の児童劇公演を持っていたことは既に記したが、川上の演劇運動に対する熱い思いをこうした子供相手の芝居にも感ぜざるを得ない。それは子どものときからの観劇体験が大人になって大きく花開くからである。

おわりに

川上音二郎一座の台湾を題材にした演目を見てきた。内容の詳細は台本が残されていないために把握できないが、批評から可能な限り川上の世界を検討することができた。川上音二郎は「生蕃討伐」公演後に若くして鬼籍に入る。一種のアイデアマンであった川上が、この後、新しく台頭する演劇学者たちと手を組んで芝居をするようになったらどんな破天荒劇的世界が開かれたかと推測する。それはとても興味深いものであったろう。

時代の転換を強く感じたのは、「生蕃討伐」公演と文芸協会の「ハムレット」公演が一九一一年七月に重なったことであつた。前者は新演劇を切り開き、ともかくにも明治の現代劇を引っ張ってきた存在であり、後者はこれから発想の転換をして既存の演劇を否定してより新しい演劇運動を切り開こうとしている集団である。歌舞伎に對抗的に登場した川上の新演劇は、その明治に存在する全ての演劇に對抗的な演劇を作ろうと立ち上がった集団と入れ替わることになるのだ。彼等の時期を同じくした公演がはからずも一つのターニングポイントとして大阪に存在したのは、歴史の偶然が生んだドラマだと言うことなのかもしれない。

（二〇〇九年二月一日）

注1 台湾については、周婉窈著『台湾の歴史』（平凡社二〇〇七年）、伊藤潔著『台湾』（中公新書一九九三年）、片倉佳史著『台湾 日本統治時代の歴史遺産を歩く』

（戎光出版二〇〇四年）を参照した。なお、新演劇に関する研究は科学研究費（平成20年度〜22年度基盤研究C）を得て、現在研究途上にある。二〇〇八年二月、台北に調査に行き、川上一座の足跡を辿った。小稿はその一つの成果である。

注2 副題「新聞にみる人物像」雄松堂出版一九八五年一月。以下、本書からの引用には白川本と記す。なお本論に引く引用の原文は旧字旧かなルビ付である場合が多い。が、ここでの引用は必要に応じて新字・新かな・ルビ無しで引く。

注3 歌舞伎座の入場料を下げたのは、歌舞伎に対する川上の一種の謙譲の表れであつたのかもしれない。

注4 実名は不明。「歌舞伎新報」一六三三号一九八六年二月。「歌舞伎新報」はプロの批評家ばかりではなく、芝居愛好家の投稿も多い。蘭圃は一八九六年（明治29）に登場してその年の間批評を書いている。その後は登場しない。

注5 川上は若き文士江見水蔭に翻案を依頼し、その原稿料に千円という「破格の報酬」を支払ったと言うニュースが新聞紙上を賑わす（都新聞二月一日 白川本）。これもいい宣伝になったと推測される。また同記事には、オセロは川上だが貞奴はイヤーゴの妻エミリヤで、イヤーゴは難役なれば高田、デスデモナは未定とあった。

注6 都新聞にけい舟が連載した「海賊島 川上音次郎の探検 一〇五」（一九〇二年一月一八日〜二四日白川本には第二回迄掲載）では、一月一七日に東京を出発、二七日に台湾澎湖島媽公城に到着、二月八日に帰京とある。これが誤解されて台湾に一月二七日に到着したと考えられているようである。が、台湾日日新報の一月二六日の記事「川上音二郎丈の談話（一）」で筆者しうかうは、「二昨日入港の台中丸で突如としてやって来た」と記しているから二四日に台湾へ到着したと考えられる。台湾の何処の港に着いたのかは明らかではないが、注9を参照されると分かるように、基隆だと推測される。

けい舟は「神戸から台南丸で台湾澎湖島へ志した」と記述している。台湾日日新報の（しうかう）の連載は、一月二六日から二月一〇日まで13回連載された。なお、国立台北芸術大学技芸学院の林子竝氏によれば、台湾日日新報は日本語版と台湾語版（中国語とはこの時点では言えないし、清国語ともいえないから便宜上台湾語とした。漢人語と言えはいいのかもしれない）があるという。台湾語版は未見。わたくしは、日本語版を台北国家図書館で閲覧した。台北滞在中に、石婉舜「川上音二郎的《奥瑟羅》與臺灣」（『戯芸学刊第八期

二〇〇八年」を林氏から頂戴した。石論文では英文サマリーで理解したかぎり、台湾語の台湾日日新報が引かれていて、川上の台湾訪問と「オセロ」に付いて記述されているようだ。ただ、使用言語が中国語であるため、わたくしが引く台湾日日新報の「談話」と同一内容かどうかは明らかではないし、論文の内容も現在までのところ理解できない段階である。

注7 『歌舞伎』(三十四号)には鈴木の名が明記され、すぐに川上の「オセロ」に関する弁になる。鈴木の記事はないから、おそらく鈴木が取材して話を聞いたのではないだろうか。

注8 日本演劇学会二〇〇五年全国大会「演劇史再考」で、国立台北芸術大学の邱坤良教授が「植民地時代台湾における日本演劇」について特別講演をした(中国語)。このとき初めて川上が台湾に巡業で行っていたことを知った。通訳つきの発表であったが、台湾現代演劇への影響が主軸の話で、この時点では巡業の詳細を理解することはできなかった。今回の調査で、わたくしは台湾日日新報を閲覧することにより詳細を把握することができた。

注9 台湾日日新報には、一九一一年五月四日から六月六日まで、川上の台湾巡業に関する記事が載る。誌面も日によって異なり、続き物であったり、単発記事であったりする。演目、上演評、動向などが載った。今回の川上の行程を見ると、当時本土から台湾への舟は基隆に到着していたようだ。となると2章に記した川上のはじめての渡台も基隆に入港したと考えていいと思われる。注6参照。

注10 「帝國座の七月興行は近來流行の現代趣味などというハネカツた所をサラリと捨て夏場だけに煙火にでも譬へさうなバツと華かで涼しげな狂言を選び、その上本統の馬を使つて舞台を縦横に乘回すといふ放れ業のお景物まで添へて居る(略)「生蕃討伐」は淡白で面白い▲篠崎譲といふ少尉が生蕃を帰順させる為に蕃社へ行き漸く功を収めんとしたのを暗愚な隊長の子の軍曹と浅慮な隊長の妻に誤られて罪に堕ち己に処刑に処せられんとしたのを義侠な隘勇と蕃社で救ふた少女と改心した大尉の妻とに救われ七社の生蕃が帰順して目出度く市が栄えるといふ筋▲この座の特色として道具の組立が頗る巧く日本兵が生蕃に虐殺される阿蓮庄山中の場など殊によく女子供の可厭がる銃砲を用ひないで十分に凄味を見せ其の場の幕切れに、一旦舞台を暗うして活人画式に累々たる死体の上に寂しい月を照して静に幕を引くなどなかなか味を遣る▲川上の篠崎少尉は沈勇な青年といふ心持をよく写し、タカマン蕃社で命令を守らぬ竜造寺軍曹を斬

つて生蕃に対する意気込みが非常にい、▲中野の竜造寺大尉は唯正直な地方の軍隊ばかりを経廻つてゐる将校などに能く見る型だ、但し酒精中毒のやうな聴取り難い白には閉口する(略)▲貞奴の大尉の妻秀子は男装して裸馬に乗るばかりか仙吉にその馬の尻尾を掴んで引戻させ一鞭当て、舞台を駆込むという奇抜な所を見せるので観客は夢中になつて喝采する、そればかりは大概の俳優にも真似が出来まい▲福井の隘勇はカウチンは上江りはするが拙くはない」(大阪朝日新聞七月五日号)

注11 露国觀光団は到る処大持てゝ、満足以て帰国の途に上ぼるさうだが、日本人の歓迎術は其の実まだまだ下手だ▲向ふでは日本の国歌を記憶し、キーマーガーと来ると直ぐに起立脱帽して敬意を表する、又神社仏閣に参つても必ず黙礼するやうに注意して居るのに、此方では歓迎員さへ露国国歌の譜を知らず、帝國座では大阪府の高等官まで、露国国歌の吹奏中平気で着座して居つたやうな事だ(大阪朝日新聞「天声人語」七月一四日号)

台北では国立台北芸術大学の林于竝氏にお世話になった。記して謝意を表したい。なお、本稿の引用資料は、台湾国立国家図書館、早稲田大学演劇博物館、早稲田大学中央図書館、日本新聞ライブラリーの所蔵資料による。